【創価学会破門二十年目にあたり、創価学会の永遠の勝利を祝す】

宗祖日蓮大聖人の御聖訓に云く、**「夫れ天魔は仏法をにくむ」**（御書　五百頁）と。

二十年前の平成三年十一月二十八日、貴殿は創価学会に「破門通告書」を送付したが、驚いたことに、この文書には、御書がまったく引用されていない。

それはすなわち、貴殿が大聖人の教えではなく、自分の「己義」によって、創価学会を破門にしたという証左であり、これこそ「天魔は仏法をにくむ」という姿そのものであることを物語っている。

■腐敗堕落した貴殿に、信徒を破門にする資格なし

そもそも、この「通告書」なる文書に書かれている内容は、衣の権威を振り回すだけの、僧俗差別の感情論でしかない。もとより、すべての原因は貴殿の腐敗堕落にある。否、より正確に言えば、腐敗堕落を恥としない貴殿の信心の欠落にある。

あらためて言うまでもないことだが、「C作戦」という謀略で創価学会を破壊しようとした張本人は誰か。また、日蓮正宗の歴史を閉ざした張本人は誰か。それは貴殿である。

信徒の供養で遊蕩を繰り返していた貴殿に信徒を破門にする資格があるはずがない。それどころか、御書に照らせば、貴殿は大聖人の弟子として失格である。大聖人は貴殿のような堕落僧に対して、**「遊戯雑談のみして明し暮さん者は法師の皮を著たる畜生なり」**（同一三八六頁）と仰せである。創価学会を破門にする以前に、貴殿こそ大聖人から破門されているのだ。すでに決着はついていたのである。

■堕落した法主でも僧宝になるという「己義」

御書には、〃悪侶を戒めよ〃、〃悪侶に用心せよ〃との大聖人の御言葉が繰り返し出てくる。

「悪侶を誡めずんば豈善事を成さんや」（同二一頁）

「三明六通の羅漢の如き僧侶等が我が正法を滅失せん」（同一八二頁）

「大悪魔は貴き僧となり父母・兄弟等につきて人の後世をば障るなり」（同一四九七頁）

しかし、〃僧侶に赤誠の供養をしてきた信徒を蔑視し、何をしてもよい〃などとは一言も仰せではない。ゆえに、貴殿は御書の引用ができない。一文一句でも引けば、宗祖の破折は全て貴殿に向けられるからである。そして代わりに貴殿らが言いだしたことは、僧宝義の改ざんである。

要するに、〃堕落した法主でも「僧宝」であるから、批判してはならない〃というのだ。何という恥知らずな戯言か。貴殿のような者を大聖人は「食法がき」と喝破されている。

「出家となりて仏法を弘むる人・我は法を説けば人尊敬するなんど思ひて名聞名利の心を以て人にすぐれんと思うて今生をわたり衆生をたすけず父母をすくふべき心もなき人を食法がきとて法をくらふがきと申すなり」（同一一一一頁）

■客殿の座配を見れば、一目瞭然。法主は日目上人の座席。

本来、宗義に基づけば、僧宝は日興上人お一人である。日目上人以下の歴代法主は、〃下種三宝をお守りする〃という信心に根差した行躰によって、はじめて僧宝の一分に加わることができるのだ。

それを顕わしているのが、客殿の法主の座席の位置である。法主は「御本尊・日蓮大聖人・日興上人」に対して、左に座り、東を向く。このことを日達上人は以下のように説明されている。

「我が宗の三宝は、御本尊が法宝、大聖人が仏宝、日興上人が僧宝と立てます。それに対して日目上人は座主である。今云った通り、管領して、その大聖人の仏法を治めていく、よく受取って治めて行く、即ち管領と云う意味を持って行くのである。統べ治める、そして統治をして行く。その日目上人の後は、皆筒の流れのように、それを受継いで行くにすぎない」「だから代々の法主が日蓮大聖人ではない。大聖人そのものと間違って書かれてよく問題が起きますが、その点ははっきりしてもらいたい。只三宝をお守りする座主、日目上人は永代の座主、広宣流布の時の座主、それを忘れてはいけないですね。だから客殿のあの座席、法主のあの座席は目師の座席なのです。」（昭和五十二年五月二十六日）

■三宝義を改変し、変質したのは宗門

貴殿らは、戸田会長の宗門外護の言葉を悪用し、「創価学会は変質した」と言っているが、戸田会長の時代から、悪侶を糾弾する精神は何も変わっていない。変質したのは宗門である。

以下、戸田会長が聖教新聞の「寸鉄」に書いた戒めである。

一、寸鉄居士答えて曰く「御僧侶を坊主と言った覚えなく、坊主を僧侶と呼んだおぼえはない」。
一、仏様でもないくせに仏様のような顔をして威張る坊主が気に入らない。
一、坊主の仕事は衆生を成仏させる事だが、自分が成仏出来るかどうか考えた事があるのか。
一、僧侶にして信心なしと云わば毛のなき猿が衣をつけたようなものである。
一、化物坊主と寸鉄居士の大喝でおこった坊主があるげな。寸鉄居士その坊主を呼んで曰く「第六天坊主」と。

三宝義を改ざんして、法義を自分たちの都合の良いように変質した貴殿こそ、戸田会長の言う「第六天坊主」である。

■「貫主が己義を構えたら、放逐せよ」と明言していたのは誰か

己義を構えた法主を「放逐せよ」と名言していたのは、他ならぬ貴殿である。貴殿は平成四年八月の全国教師講習会で次のように述べた。

「貫首が己義を構えたという場合には、皆のほうが用いてはならない。これも私はそういう在り方が、あるいはあるかと思います」「南無阿弥陀仏と私が唱えだしたら放逐するだろうね。絶対に放逐しなきゃいかんよ！」

「南無阿弥陀仏」と唱えるとは、大聖人の教えに反するということと同義である。この貴殿の言葉の通り、僧俗差別・三宝義改ざんの「己義」で創価学会を破門に処した貴殿は大聖人によって放逐されるのだ。

■民衆の自立を説く「法華経」。在家の男女が仏の使い。

日蓮大聖人は御書の中で常に「法華経」を引用されているが、数多く引用されているのが「法師品」である。そして、その中でも繰り返し引用されているのが、**「若し善男子善女人、我が滅度の後に能く窃かに一人の為にも法華経の乃至一句を説かん。当に知るべし是の人は則ち如来の使ひ如来の所遣として如来の事を行ずるなり」**の文と**「此の経は如来の現在にすら猶怨嫉多し、況や滅度の後をや」**の文である。

すなわち、法華経を弘める在家の男女が「仏の使い」であり、「仏の所遣」として「仏の事」を行じているのである。これは「法華経」が民衆の自立を説いている証であるが、同時に、その行く手には「怨嫉」が多いとも説かれている。

この「法師品」の通りに、法華経を弘めて来たのが創価学会の歴代会長、なかんずく池田名誉会長とその弟子たちである。そして、その広布の前進を妬んだのが貴殿である。

■民衆の自立を阻む者こそ「僭聖増上慢」

民衆の自立を妬む者こそ、僭聖増上慢である。その特徴について「勧持品」には、**「或は阿練若に、納衣にして空閑に在って、自ら真の道を行ずと謂いて、人間を輕賤する者有らん、利養に貪著するが故に、白衣の与に法を説いて、世に恭敬せらるること、六通の羅漢の如くならん」**とある。

この増上慢の本質は「人間を輕賤する者」であり、理由は「利養に貪著するが故」である。これは「僧俗差別」で民衆を見下し、「供養」が欲しいために葬儀・塔婆に執着する貴殿の姿そのものである。

貴殿は創価学会のことを「人間以下の存在」「創価学会のゲスども」「よほどのバカかアホ」「ボンクラども」と罵しり、「民衆、民衆って言う奴ほどバカ」と言う。

そして宗門をあげて、〃葬儀に僧侶を呼ばないと成仏しない〃、〃塔婆供養をしないと故人は成仏しない〃などと信徒を脅す。貴殿らが執着しているのは、僧侶の権威と供養であることは明らかだ。

■布教があってこその本尊書写。御本尊授与の停止は、広宣流布の放棄

宗祖大聖人云く、**「願くは我が弟子等・大願ををこせ」**（御書一五六一頁）、**「大願とは法華弘通なり」**（同七三六頁）と。

貴殿は創価学会の御本尊授与に対して、〃法主の許可がない〃と難癖をつけているが、まったく本末転倒した考えである。

大聖人の御遺命は法華弘通・広宣流布である。すなわち、布教があってこその御本尊書写であり、いくら貴殿が「許可がない」と叫んでも、布教がなければ、御本尊を書写する必要はない。

事実、創価学会が出現する前の宗門では、一向に折伏は進まず、同じ檀家が供養するたびに「賞与本尊」として何体も御本尊を受けていた。また、法主が登座記念として御本尊を書写し、多額の供養をした者にその御本尊を授与していたこともある。布教のための御本尊書写ではなく、供養を集めるための書写であったのだ。

創価学会が出現し、かつてない大折伏が始まり、有難いことに、法主は布教のために御本尊を書写するという役割を果たすことができたのだ。

ところが、貴殿は創価学会に対する嫌がらせとして、御本尊下付を停止した。これは、貴殿が御本尊の書写を放棄し、同時に広宣流布を放棄したということだ。

■今の宗門が成り立っているのは、すべて創価学会の物まねをしているから

今回の問題が起こるまで、宗門は「広宣流布は在家の仕事。僧侶の役割は令法久住」「折伏は創価学会の役目、法華講は法灯相続が役目」と言っていた。

ところが今は、まるで草創の創価学会をまねたかのように、折伏目標を立てて、法主が号令をかけている。なんと、大きく変質したものか。

所詮、宗門のやっていることは物まねでしかないから、成果は出ない。そこで貴殿らは安易な方法として、「学会員を脱会させろ」と方向転換をした。そして、その宗門の手足となっているのは、皮肉なことに旧信徒ではく、創価学会を脱会した者たちである。

そのうえ、〃布教上手〃ともてはやされている住職もやはり、多くは創価学会出身である。つまり、貴殿の嫌いな創価学会出身の僧俗が、結局は今の宗門を支えているということだ。貴殿が一番知っているように代々坊主も、法華講も折伏はできない。創価学会を破門した今でも、形を変えて宗門は創価学会に依存しているのである。

■血脈断絶のもとに集まるのは有象無象の「不信心の者」だけ

しかし、貴殿らが創価学会出身の僧俗を利用して、いくら脱会者作りをしようと思っても、すでに信心を失い、血脈が断絶した貴殿のもとに集まって来るのは、脱会者作りに狂奔する、信心なき退転の輩だけである。なぜならば、広宣流布を真剣に行ずる者は、学会を破門した

後は、日顕宗には最早、誰人も残っていないからである。

貴殿が創価学会攻撃に使う僧俗の本質は、自分の宿命を他人のせいにして怨嫉して逃げ出して来た臆病者。役職にこだわり、登用されないのは自分のわがままのせいではなく、組織のせいだと逆恨みしている名聞名利の者。衣の権威に近づいて創価学会を〃見返してやろう〃とする忘恩の者だけである。まさに悪人が出家の処に集まったのだ。そんな不信心の者を貴殿が利用することで、最後には宗門が自界叛逆するだけである。

現に、貴殿は自分の血脈相承を否定した山崎正友に頭を下げて、創価学会攻撃に利用したが、ことごとく失敗した。また、福島源次郎が脱会した時には、「すごい人間が宗門についた」と喜んでいたが、結局、福島は貴殿らを馬鹿にし、自分の講を作って宗内に混乱を生んだだけであった。

貴殿らも脱会した忘恩の者たちも、互いに利用し合っているだけであり、そこに広宣流布を目指す信心はひとかけらもない。ゆえに、最後には仲違いし、**「畜生は残害とて互に殺しあふ」**（同一四三九頁）という姿を現じるのだ。

■民衆仏法を確立した創価学会の永遠の勝利

多くの老僧が証言しているように、戦後の本山の窮乏を救ったのは法華講ではなく創価学会である。多額の供養をし、三百五十六カ寺を寄進し、客殿などの本山の建物をはじめ、大御本尊を安置する正本堂を建立寄進したのも創価学会である。

そしてその恩を忘れ、真心の供養で遊興し、八百万信徒の浄財で建立された正本堂を破壊したのが貴殿である。人間として絶対に許されるものではない。貴殿の悪名は、世界の宗教史に永遠に刻まれゆくのだ。

忘恩の貴殿の慢心を破して、創価学会は大聖人の仏法を民衆のもとに取り戻した。そして、この偉業は仏法三千年の歴史を変えるエポックとなった。なぜなら、真の意味での「民衆仏法」が確立し、万年にわたって民衆が主役となるからだ。これこそ、創価学会の永遠の勝利である。

我々、青年僧侶改革同盟はこの創価学会の永遠の勝利を心より祝福するとともに、僧俗差別で「人間を輕賤する」貴殿は、必ずや日蓮正宗の歴代法主から除籍されるものと、あらためて断言するものである。

平成二十三年十一月二十八日

日蓮正宗青年僧侶改革同盟一同

阿部　日顕　殿